## 内視鏡による低侵襲手術を実施

医療法人社団 誠療会

熊本 成尾整形外科病院

# 豊富な手術実績で全国から患者が来院 手厚いリハビリテーションで早期回復をめざす

熊本市中心部にある成尾整形外科病院は昭和52年（1977年）1月の開院以来、脊椎、関節疾患の治療を主とした急性期医療中心の整形外科専門病院として、「患者様の立場に立った医療」を提供し続けてきた。毎年、約800件の年間手術実績があり、高齢化の進展に伴って増え続ける脊椎、関節の様々な疾患に応対している。患者の自主性を重視し、やる気を引き出すリハビリテーションも好評。満足度の高い医療とは何かを常に考え、患者との信頼関係を大切にしながら、良質な医療を提供している。

### 患者の身体的負担を軽減する低侵襲手術を実施

成尾整形外科病院には現在、9人の整形外科医が在籍。うち6人は日本脊椎脊髄病学会の指導的立場にあり、経験豊富な専門医が揃っている。

昨年（平成26年1月～12月までの1年間）の手術件数は計916件。腰部脊柱管狭窄症251件、腰椎椎間板ヘルニア187件と、これらの脊椎疾患が手術全体の約55％にのぼり、近年はさらに増加傾向にある。

「特に腰部脊柱管狭窄症の手術では70歳以上の患者様が約半数を占めており、ADL（歩く、立つなどの日常生活動作）を向上させて活動的な日々を再び送りたいと望む高齢者の方々は多いですね」と成尾政一郎院長は語る。

脊椎疾患の治療は「まずは血流をよくする薬や鎮痛剤の服用、痛みが強ければ神経ブロックなどの保存的療法をしっかりと行います。それでも痛みが改善せず、日常生活に支障をきたす場合は手術的治療を検討します。いつも心がけているのは、患者様の訴える症状、身体所見、生活環境などの背景をしっかりと把握した上で治療法を考えていくということ。そのために患者様のお話をきちんと傾聴することを最も大切にしています」（成尾院長）

腰部脊柱管狭窄症の場合は椎弓切除術や椎弓形成術、腰部椎間板ヘルニアでは椎間板ヘルニア摘出術が一般的だが、近年は患者への侵襲を最小限にするため、顕微鏡を用いた低侵襲手術に加え、最近では、内視鏡下腰椎椎弓切除術（MEL）、内視鏡下椎間板摘出術（MED）と呼ばれる内視鏡を使った低侵襲手術を数多く行っている。

「これは先端にレンズがついた内視鏡の管を身体に挿入し、神経の圧迫を取り除く方法で、従来の手術に比べ、切開する傷口が2センチ程度と小さいため、出血や術後の痛みが少なくて済み、早期退院を目指すことができます。患者様の要望を聞きながら、症状や事情に合った最も良い治療法を提案しています」（成尾院長）

年間手術件数の残り約2割は股関節や膝などの関節疾患だ。変形が進行した場合は人工関節置換術を実施。特に股関節の人工関節置換術については、術者の扱う器具が患者の身体のどこに位置するかを三次元的に確認できる医療用ナビゲーションシステムを使っている。

「これを用いることで、インプラントの設置位置などにおいて従来の手術より、より的確な手術を実施することができます」（成尾院長）

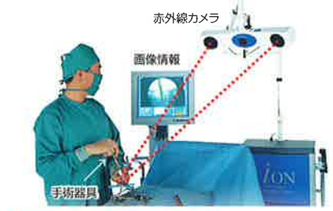
■内視鏡下による低侵襲手術により筋肉の剥離をせず出血も少量に抑える

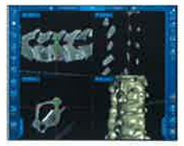
病院長 **成尾 政一郎**

なるお・せいいちろう／平成7年久留米大学医学部卒業。熊本大学大学院博士課程修了。医学博士。日本整形外科学会認定整形外科専門医、日本脊椎脊髄病学会会員。日本臨床整形外科学会病院WG委員。

**病名別手術実績**
平成26年1月～12月

| 病名（合計） | 916 件 |
|---|---|
| 脊椎疾患 | 501 件 |
| 頸椎疾患 | 46 件 |
| 胸椎疾患 | 3 件 |
| 腰椎疾患 | 452 件 |
| 腰椎間板ヘルニア | 187 件 |
| 腰部脊柱管狭窄症 | 251 件 |
| その他 | 14 件 |
| 膝関節症 | 138 件 |
| 股関節症 | 19 件 |
| 痙性麻痺 | 108件 |
| 骨折その他 | 150件 |



■ナビゲーションシステムと画像により骨と神経と手術器具の位置を把握し、MIS（最小侵襲手術）の術前計画、術中も画像で確認しながら適したアプローチを行う。

### 個別の状態、目標に合わせたリハビリテーションプログラムが充実

術後のリハビリテーションを手厚く行っているのも同院の特長だ。現在、リハビリテーション科には理学療法士14人とアシスタント2人が、外来を含めた患者のリハビリテーションを担当している。リハビリテーション科科長で理学療法士の大津知昌さんはこう話す。

「同じ疾患でも筋肉の弱い部位など身体の状態は人それぞれなので、検査、測定をして問題点を抽出し、個別のプログラムを作成します。たとえば『ゴルフをやりたい』『主婦業をこなせるようになりたい』『バイクに乗れるようになりたい』など、ここまでよくなりたいというゴールも患者様によって様々ですから、その方の目標に合わせたプログラムにするのが基本です。外来や保存療法の方もすべての患者様に対して考え方は同じです」

手術で痛みが改善し、無事退院を果たしても、術前と同じ行動スタイルを繰り返していては再発の恐れもある。

「入院中は、退院後を考えて自宅や職場でどのような運動をし、どんなことに気をつければよいか、バランスのとれた理想の姿勢や動作などを覚えてもらうようにしています。患者様の自主性を引き出し、モチベーションをどう高めていくかが私たち理学療法士の役割。生涯にわたって予防に役立つ方法をお伝えできれば」（大津さん）

■柔軟や筋力アップなどの身体のメンテナンスや首、腰、関節の疾患を予防する動作の指導も行う

**大津 知昌**

おおつ・ちあき／リハビリテーション科科長。理学療法士。

成尾院長も「『早くよくなる気を引き出し、患者様が再びQOL（生活の質）を取り戻す過程に寄り添っていくのが、私たちの使命と考えています」と話している。

HOSPITAL DATA

医療法人社団 誠療会
成尾整形外科病院
〒862-0958 熊本市中央区岡田町12-24
TEL.096-371-1188
http://naruoseikei.com/
■受付（予約診療）／月～土 8:30～12:00
月～金 13:30～17:00
■休診／日曜・祝日・土曜午後

## 脳性小児麻痺や脳卒中などで運動機能障害や後遺症を持つ患者対象に、機能性改善を目指す筋肉の手術を実施

**池田 啓一**

いけだ・けいいち／平成2年熊本大学医学部卒業。日本整形外科学会認定整形外科専門医。日本体育協会公認スポーツドクター。

成尾整形外科病院では、脳性小児麻痺や脳卒中（脳出血、脳梗塞、くも膜下出血）などで運動機能障害や後遺症を持つ患者に対し、「整形外科的選択的痙性（けいせい）コントロール手術」（OSSCS）と呼ばれる筋肉の手術を行っている。この手術は、痙性麻痺して筋肉がつっぱった部位の緊張を弛緩することで機能性を改善することや、変形や脱臼の改善、予防を図ることなどを目的としている。

同院では昨年1年間（1月～12月末）で同手術を110件実施。その約半数は18歳未満の患者という。全国的にみてもこうした手術をする病院は少ないため、九州各県をはじめ遠方からの来院者も絶えない。

担当する池田啓一医師は、「脳性麻痺や脳卒中などで起こる痙性麻痺は、薬物療法やリハビリテーションなどの治療法がありますが、OSSCSは痙性がある部位周辺の筋肉をバランスよく切離、延長することで異常な筋肉の緊張を弱め、機能性を改善しようとする整形外科的アプローチの手術です。完治は難しいものの、現状の中で少しでも楽な状態にすることを目指しています」と説明する。

同手術の考案者である南多摩整形外科病院院長の松尾隆医師の元で学んだ池田医師は平成6年から昨年末までで千件以上の同手術実績を持つ。

「それまで立てなかった幼児がつかまり立ちできるようになったり、車椅子の方が杖で歩行できるようになった、あるいは自分で食事ができたなど、運動機能障害が改善し、生活の質が向上した例はたくさんあります。患者様の意思を尊重し、信頼関係を大切にしながら、誠心誠意、対応させて頂きます」（池田医師）

約4歳児への両股関節OSSCS。立てなかった幼児が、つかまり立ちができるように。

約6歳と8歳の時に行なった両股・膝関節OSSCS。車椅子から杖での歩行が可能になった例。